

協同の系譜

⑤

第1部 川崎 平右衛門

木曾三川の治水

痛み共有問題解決へ

川崎平右衛門は武蔵野新田開発を成功させた後、寛延2(1749)年7月に美濃国本巣郡本田陣屋に支配替えとなり、木曾三川の治水に当たる。

木曾三川とは濃尾平野を流れる、東から木曾川、長良川、揖斐川をい、いずれも木曾川水系に含まれる。木曾三川は下流の川底が高く流れが滞留するとともに、西側ほど地形が低く、三川が複雑に合流・分流を繰り返していた。このため上流と下流、東と西で利害が一致せず、かつ小領に分かれ、統一的な治水対策が困難なことも加わり、洪水の常襲地帯であった。東海道五十三次が熱田から桑名までここのだけ海路となるのも、陸路を続けると川、渡しが多くな

り、また氾濫によってしばしば通行が妨げられることによる。この地域では室町時代後期から戦国時代に輪中が形成されるようになる。江戸時代に入ると新田開発が活発化し、村落の形成とともに輪中の築造・修復も盛んに行われるようになった。輪中による大河川下流域の開発は農業生産の向上をもたらした。一方で川道が狭まって遊水池は減少し、下流の川床が土砂の堆積により上昇して、洪水の危険性を増し、新たな治水問題を引き起こすことにもなった。

本格的な分流に着手

このため宝永2(1705)年には「近世治水工事中最大規模

農的社会デザイン研究所代表 葛谷 栄一

木曾三川と大樽川



模」ともされる「宝永の大取払」により、やぶや立ち木、民家など流水の障害物の取り払いなどが行われた。しかし、効果は限定的であった。そこで抜本策として構想されたのが三川分流工事であり、三川の合流・分

流の排除を基本とした。巨額の財政支出を必然とし、とりあえず二本松藩による工事が行われたが、小規模で根本的な治水対策には程遠いものであった。これを受けて幕府は本格的な三川分流のための工事を行う腹固めをし、こうした中、治水巧者として登用された一人が川崎平右衛門であり、薩摩藩によるお手伝い普請であった。

堀上田農法など提案

そこで平右衛門は、締め切り堤ではなく、流れ落ちる水量を調整する洗堰(あらいぜき)の設置を提案。寛延3(1750)年10月には農民の負担によって実施する百姓自普請による食違堰設置を幕府に請願して認可を得、翌年1月に歟(くわ)入れ、4月には完成させている。両者の調整を図るため平右衛門は、食違堰設置と並行して被害を受けそうな村への排水路の設置や、土を盛って水田にし、土をとって低くなったところを排水路とする堀上田(ほりあげた)農法を提案するとともに、益を受ける側からは米を出させて被害を受ける側の補償に充てるなどの手だてを講じた。

おくれがわ)食違堰(くいちがいぜき)設置の案件であった。大樽川は長良川の水勢を緩和するために開削された川であったが、これによって揖斐川筋や大樽川流域はかえって洪水が増加することになった。このため大樽川流域の42カ村の農民は大樽川を締め切り、長良川からの水を断ち切る工事の実施を繰り返して陳情していた。これを唱導した。(次回は11日付)

れに長良川側の13カ村が強硬に反対を続けてきたものである。

協同の系譜 ⑥

第1部 川崎 平右衛門

農民の納得と協力

治水への感謝今なお

寛延2(1749)年に美濃国本巣郡本田陣屋に支配替えになった川崎平右衛門は、長良川の水勢を緩和するために開削された大樽川(おおくれがわ)が、かえって揖斐川筋や大樽川流域に洪水を引き起こしていることに対処するため、反対する長良川側の農民との利害調整に腐心しながら、大樽川食違堰(くいちがえせき)を完成させた。

費用40万両の大工事

しかし、宝曆3(1753)年夏に大洪水が発生。根本的な問題解決のため薩摩藩に御手伝普請が命じられ、宝曆4(1754)年2月から宝曆5(1755)年5月にかけて三川分流工事が行われた。この最重要ポイントには、長良川が揖斐川に合流する大樽川と、木曾川と揖斐

川の合流地点である油嶋で、大樽川には平右衛門による食違堰とは別に薩摩洗堰(あらいせき)が設けられ、油嶋では堤防締め切り工事が行われた。

この薩摩藩負担による御手伝普請は、目標をほぼ完全に近い形で実現したものであったが、当初予定されていた工事費8万両が最終的には40万両にまで膨れ上がった空前の大工事であった。当時、藩財政は66万両の借財を抱える中、まさに「薩摩藩の血涙のじみ出た資金」によって工事費は賄われた。

加えて資材の調達などでの幕府側との軋轢(あつれき)が絶

えず、藩士51人が自害、赤痢と粗末な食事や過労により157人が倒れ、33人が病死した。工事完了後には総指揮に当たった薩摩藩家老・平田鞆負(ゆきえ)も一連の責任をとって自害している。まさに歴史的な大事件で「宝曆治水事件」として知

られ、幕府への怨念は強く、明治維新にも少なからざる影響をもたらしたとされる。

この宝曆治水工事が行われる間、平右衛門は薩摩藩による工事とは別途、逆水留閘門樋(ぎやくすいどめこうもんひ)の建設に奔走することになる。上流域での川床の上昇とこれに伴う水量増加が問題化し、大樽川食違堰が完成した寛延3年には牛牧(うしき)村他10カ村から五

六川樋門建造願いが本田代官所に提出されている。長良川が増水する際に樋門(水門)を閉じて長良川から支流である五六川への水の流入を防ぐもので、逆水留閘門樋といわれる。

これは平右衛門が構想し、牛牧輪中の村方を説得して請願を繰り返させたとき

構想し、牛牧輪中の村方を説得して請願を繰り返させたとき

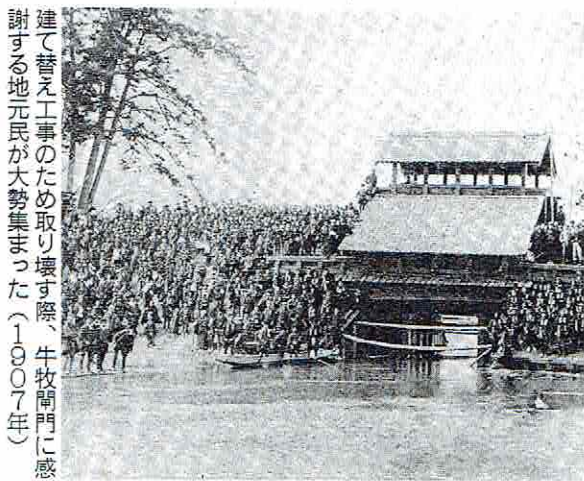
この間の平右衛門の活躍について、「一事が万事そのやり方が民主的であり、農民の納得、信頼を得てその協力の下に遂行された。しかし、工事費が予定外に膨らみ、幕府から見放され、農民も平右衛門を信頼し、工事完成を望む農家を転々とし、奇食をしながら工事を続行した」と伝えられている。

また、平右衛門は治水工事に当たっては、広域での対処が肝心であり、互いに痛みを分かち合いながら、あくまで公益を優先して事を運んでいくことを基本スタンスとした。

こうした平右衛門の働きと人徳をたたえて穂積町(現瑞穂市)には川崎神社が建てられるとともに、興禅寺では今日に至るまで平右衛門の命日には法要が続けられている。(次回は18日付)

幕府が見放すも続行

農的社会デザイン研究所代表 葛谷 栄一



建て替え工事のため取り壊す際、牛牧閘門に感謝する地元民が大勢集まった(1907年)

協同の系譜

⑦

第1部 川崎 平右衛門

田中丘隅に学ぶ

尊徳と結び付ける縁

木曾三川での薩摩藩による宝曆治水は、大樽川(おおくれがわ)洗堰(あらいげき)、油嶋締切そして逆川締切が大きなポイントとなった。三川の分流工事は上流域での川床の上昇を招く危険性があることから、川崎平右衛門はこれに対処するため、牛牧開門(うしきこうもん)の建設に取り組んだという構図になるようだ。

大樽川について平右衛門は寛延3(1750)年に食違堰(くいちがいげき)を完成させたが宝暦5(1755)年、薩摩藩により別途「薩摩洗堰」が設けられた。これは完成間もなく宝暦5年の出水で決壊流出したため、宝暦8(1758)年、あらためて全面石築の洗堰が築造されている。

「(一)として被害が緩和されるよ

身をもって水害体験

ところで、水を有効に活用する利水が中心の武蔵野新田開発で功績をあげた平右衛門が、なぜ治水巧者として治水工事に当たらることになったのか。平右衛門は多摩郡押立村(現府中市)の出身であり、押立村そばを流れる多摩川は「あばれ多摩川」と言われ、水害の常襲地帯であった。小さい時から頻発する大

農的社会デザイン研究所代表 葛谷 栄一

小の水害を身をもって体験し、水害への対応・対策を現場で学んできたものと思われる。

さらに平右衛門は新田世話役になって3年目の寛保2(1744)年に、江戸時代の三大洪水の一つとされる「寛保の洪水」に遭遇している。関東・信州を中心に水害が発生したもので、全国で1万人以上が死亡したと

される。この水害の修復に当たり、担当代官の1方両、専門役の8000両の見積もりに対し、平右衛門は4000両とし、追加で2000両あれば今後10〜20年は工事不要にできると申し出て任され、見事に工事を完成している。これが幕府の高い評価を獲得することになる。

田沢家通じし丘隅知る

川崎家は北条氏に仕えてきた武士の家系であったが、母方の田沢家は多摩郡菅生村(現あき



妙光寺の墓前にある田中丘隅の案内板(川崎市幸区)④と川崎市内を流れる多摩川



妙光寺の墓前にある田中丘隅の案内板(川崎市幸区)④と川崎市内を流れる多摩川

られて享保8(1723)年、支配勘定並(ならび)に抜てき。荒川、多摩川、酒匂川(さかわがわ)などの治水にも当たる。平右衛門は田沢家を通じて丘隅を知り、治水に関する知識・技術を習得したことが推測される。平右衛門にとって治水に関する師は実質、丘隅であったのではないかとと思われる。

一言尊徳は『民間省要』に大きな影響を受けたとされ、丘隅によって平右衛門と尊徳が繋がって行くのである。

(次回は25日付)